

定年の日が近付いてくる。会社の枠組みからはずれ、独りぼつねんと佇んでいる自分の姿を想像して、漠然とした不安を抱く人は多い。

その時、こう思った男がいる。
「これは昔読んだ『不思議の国のアリス』と一緒にではないか。アリスが飛び込んだウサギ穴は、今まで見たことも聞いたこともない異次元の国、ワンダーランドだった。いま、自分が立っているのはワンダーランドの入り口では……」

そこにはアリスが体験したような、わくわくするような冒険の世界が待っているかもしれない。これまで自分は仕事に追われ、やりたかった趣味も勉強も何だか中途半端だった。いい機会だ。そう自分に言い聞かせ、男はウサギ穴ならぬ知のワンダーランドに飛び込んで行った。(文・深井久美)



『不思議の国のアリス』の英語版(左)とアリスと白の騎士の人形

ハートの女王

2006年11月3、4日。法政大学ポアソナード・タワーで、第12回ルイス・キャロル協会研究大会が開かれた。「不思議の国のアリス」の著者ルイス・キャロルを語るようと、各大学の教授をはじめ、日本中の熱心な愛好家が集まった。その中に、宮垣弘さんがいた。穏やかな語り口で、ルイス・キャロルとアリスの世界を語る宮垣さん。このときのテーマは「ハートの女王」。気に入らないことがあると口癖のように、「首を切れ！」と怒鳴りたてる暴君である。不景気の折のどこかの国の社長のようなことを言う女王様を軸に、キャロル研究家の人として持論を展開した。

ところでこの宮垣さん、趣味はキャロルやアリスだけではない。それは実に広範囲にわたり、かつ奥深い。まずは宮垣さん個人の歩みを簡単に振り返ってみよう。

絵描きを目指した幼少時代から
文学青年を経て三菱重工へ



宮垣弘さんは昭和12(1937)年、兵庫県龍野市(現たつの市)に生まれ、3歳のとき神戸に移った。「龍野時代は記憶にないが、美しい自然の中で皆に可愛がられて育ったのだと思う。私の楽天的な性格はきつとそのとき育まれたのではないだろうか。戦時中、疎開で広島伯母の家に預けられたときも、米農家だったためにご飯にも苦労しなかった。身体が弱かったせいかわりにみんなが気遣ってくれ、楽園のようだったと振り返る。

小学6年生の時に1人の絵描きに出会う。いわゆる「特攻崩れ」のその男性は、生活のため小学校の教師として勤務する傍ら、ひ

アリス、論語を愉しむ

宮垣 弘

たすら絵と向かい合っていた。宮垣少年はその鬼気迫るものに魅かれた。そして中学時代、後に第15回安井賞も受賞し、現在二期会の理事も務めている中西勝先生に師事。文化の香りたつぶりのアトリエの雰囲気や絵画の持つ魅力に魅せられてしまったという。

高校進学に当たり、普通校ではなく、美術を専門に学べる学校に行きたい、と両親に強く訴えた。「あんなに強く自分の進路を望んだのは人生でただ1度だけ」というが、願いかなわず地元の名立長田高校へと進んだ。「高校時代はとにかく、かたばしから読書をしました。へせから哲学書まで」

文学青年なのだから大学では文学専攻かと思いきや、京都大学法学部に進学。「文学や哲学も本当は勉強したかった。けれど、自分の性格を考えると、のめりこんでしまえばそれで、これはやめた方がいいと思ったから法学部」と苦笑する。

大学卒業後の進路として選んだのが三菱重工株式会社。動機は、大勢の人がいる大企業なので、きつと素晴らしい人と知り合えると思ったからという。

三菱重工では、IBMシステム360による調達のデータベース・システムの開発、DP関連業務、システム課長として、ネットワーク・システムの開発や統括に当たった。また、法学部出身を買われてが法務関連業務にも携わり、1970年代後半に企業訴訟として社会からも注目を浴びた損害賠償事件を担当した。そのほか、三菱神戸造船所七十五年史の編纂など、さまざまな体験ができたのは良き先輩のお蔭だと宮垣さんはいふ。

1989年、三菱重工の情報システム部長となり、1993年に退社して、三菱重工グループの株式会社リョーインの役員に。2001年には昭和通信サービス株式会社の顧問となる。



『論語集註』

「論語を読まずして語るなかれ」
文学の本質がここにある

宮垣さんにとって、人生に欠かせないものの1つが「論語」だ。論語を前にすると、「とにかく素晴らしい」と連呼する。

「学んで時に之を習つ。亦説ばしからずや。朋あり遠方より来る、亦樂しからずや。人知らずして慍らず、亦君子ならずや」

宮垣さんは論語冒頭のこの一節が、人生の要諦を尽くしていると思っている。自らのホームページでも、何しろ論語は、古典中の古典ですから、論語を読んでも話にならない。いくら本を読んでもこれを読まない読書家には入りません」としている。

取材した日も、古い和本の論語集註を持ってきてくれた。「江戸時代の武士が書見台に向かい、背筋を伸ばしてこれを読んでいたのかと思うと、まさに武者ぶるいする」そうだ。このような和

本で多くの中国の古典を読んでいたという。
「翻訳ではなく、原文で読む」というこだわりは、漢文だけではない。今も毎月友人の野口謙三さん(元三菱重工取締役)と読書会を開き、原文に挑戦している。これまでに、般若心経をサンクリット語で、ヨハネの福音書をギリシャ語で、老子や莊子を中国語で読破した。そして今ではグリムをドイツ語で読み、「雑司ヶ谷シエイクスピアの森」という愛好会にも入って古

風な英語の原書を読む。
読書だけではない。少年時代の絵に対する思いも、50歳を過ぎても再び開花。絵画サークルクワッキーの会に所属し、油絵からデッサンまで勤しむ。またあるときは、友人と同人誌「遊山」も出し、連句にも手を染める。さらに、「語学を学ぶことは楽しい。

教えることも楽しい」と、日本語学校の教師の資格も取った。

そんな宮垣さんに、ある日アリスが舞い降りた。そして今もなお、居座っている。

「ワンダーランド」に入り込んだ
定年過ぎの企業戦士

アリスを愛する人々には、幾つかのパターンがあるという。純粹に英国児童文学のひとつとして物語を愛する人や研究する人、デズド下映画が好きで挿絵が描かれたグッズを収集する人、または、他の媒体に登場するサブカルチャーとしてのアリス像を楽しむ人…。しかし、宮垣さんの場合は少し違った。

55歳を過ぎて子会社に移った。その定年の日が近づいてくる。三菱重工の子会社の常務という社会的にも認められた立場の人間である自分が、その鎧を脱ぎ捨てる。どうしようもなく振り所のない宙ぶらりんになった自分がいた。そして、天啓がひらめいた。



みやがき ひろむ：1937年兵庫県生まれ。京都大学法学部卒業後、三菱重工業株式会社入社。神戸造船所勤務時に、システム課長として、システムの開発、運用などを管理統括。所史編纂を担当した後、法務関連業務では集団訴訟対応グループ統括。1989年、三菱重工業本社勤務となり、情報システム部長に就任。1993年、株式会社リョーイン勤務となり、取締役を経て常務取締役、2001年から2006年まで昭和通信サービス株式会社顧問。現在、麻布台日本語教室講師の傍ら、シェイクスピア、ルイス・キャロル、マザー・グース、クロッキーの会など多岐にわたる団体に所属。



油絵の最新作『鏡を超えるアリス』

「僕はアリスだ」。
「ここがおかしい。社会的地位も、教養も、家族もあるいい年をした男が、ある日突然、思った。変な話だけれど、本当に自分はアリスだ、東京のアリスだと感じたのです。アリスはウサギの穴に落ちて、周囲のもの、すべてがさっぱり訳が分からぬ世界に入り込んだ。今の自分も、これまでの三菱の社会ではなく全く知らない外の世界に飛び込んだ。なら、アリスと同じようにワンダーランドをワクワクしながら冒険してみよう」と、
「ワンダーランド」の中で、アリスも宮垣さんも好奇心だけは失わなかった。そこから、宮垣さんの不思議の国知へのアドベンチャーの旅が始まった。

「不思議の国のアリス」は、
少年少女向けのファンタジー？

『不思議の国のアリス』は、イギリスはオックスフォード大学の数学者で作家のチャールズ・ラトウヰッジ・ドジソンが、ルイス・キャロルの筆名で1865年に出版した。エズベラントを含む世界60カ国以上に翻訳され、日本では、1908年に翻訳本が紹介された後、芥川龍之介・菊池寛も『アリス物語』として訳本を刊行。その魅力は、少年少女から学者・研究者まで幅広く支持され、作品の影響は児童文学・ファンタジーノベルの域をはるかに超えている。

とは言え、宮垣さん自身も会社員時代に原書で読んだ時は、ちっとも面白いとも思わなかった。しかし自分がアリスだ、と認識したとたん、アリスが遭遇する変てこでナンセンスな出来事に妙に共感できるようになった。数年前にはなんとも思わなかった文章が面白く感じるようになった。

古希を前になお続く
とどまらない知的好奇心の冒険

よく、定年後の人生を愉しむために、必要なことは、自分の好きなこと、打ち込めるものを見つける。「仲間を見つける」の2つだと言われる。ルイス・キャロル、マザー・グース、シェイクスピア、言語、思想、絵画、連句、どの対象にも熱心に取り組んでいる宮垣さんには、「素晴らしい仲間たち」と称する友人が大勢いる。その仲間たちとの関係が、宮垣さんの趣味をよりいっそう深く、息の長いものになっているようだ。

ところで、そこまで趣味を謳歌して、家庭生活は大丈夫なのか。奥様は嫌がらなかったのかと、余計な心配をしてみた。「子息2人はそれぞれ独立、奥様はかなり年季が入った宝塚ファンで、足しげく通っている。また、自ら舞台上に立つほどのクラシックバレエ好きのこと。その他にも60歳になってヴァイオリンに挑戦するなど、夫婦で異なる趣味を持ち、お互い打ち込んでいるからこそ趣味の領域は「不可侵領域」。「お互いに干渉しないし、そのことが問題にならなりたい」とゆつたり笑う。しかし「両人とも、美しいものを追求している点では似ているようだとお見受けする」。

現在は週に2回、日本語教室講師として活動。これからは、三菱重工とその関連会社で培った企業での経験をもう一度社会に還元しよう、古希を前に画策中だ。

東京のアリスのアドベンチャーは、物語のアリスの好奇心同様、とどまるどころを知らない。見知らぬ世界に飛び込み、その結果喜びを得るその姿勢は、孔子の言う「学んで時に之を習う。またよるにばしからずや」に結びつく。

論語を愉しみ実践する「東京のアリス」、宮垣さんの冒険はなお続く。

「不思議の国のアリス」を理解するには、もうひとつ裏ワザがある。それがマザー・グースを理解することであり、宮垣さんは既にマザー・グースにも馴染んでいた。

「アリスを本当に面白く思うには、ぜひ原文で読んでみてください。マザー・グースのパロディーや、英語のしゃれや言い回し、言葉遊びも英語で味わってみる。それらの素地があれば、これほど面白い物語はないと思います。それは豊かなイギリスの児童文学のピークのひとつです。いま人気の『ナルニア国物語』、『指輪物語』、『ハリー・ポッター』などの源流を辿れば、『不思議の国のアリス』に行き着くのです」

作者キャロルの名譽のために
ひとつだけ代弁したいこと

実は筆者をはじめ、かなりの読者が、キャロルについて勘違いをしているらしい。ちよつと聞きかじった程度の人間は、作者が、独身だった「少女が好きだった」と断片的な情報をつなげ合わせ、「キャロルは少女を偏愛する嗜好があった」との説を口にする。しかし、宮垣さんは、そうした下世話な説を「掃する」。「皆さん、どうしてもそちらの方に話を持っていきたがりませぬ。現在、きちんとキャロルを研究している学者たちの中に、そんなふうを考えている人はいません」



ギリシャ語で聖書を読む時のノート



「ひとつ、少女と遊ぶときは、必ず親の承諾をとった。ひとつ、成人女性ともお付き合いをした。一つとしてひとつずつ例を挙げて、論理的に『キャロルが少女偏愛ではなかった』ことを論証する姿は、心から文学として不思議の国のアリスを愛している姿だった。」